

寧夏農村の建国後の変遷について

馬場 毅、周星

周と馬場は科学研究費補助金による「西部大開発をめぐる日中共同の実証的研究」のため、2008年8月29日から9月2日にかけて中国側の共同研究のパートナーである寧夏回族自治区の寧夏社会科学院の研究者とともに、彭陽県および銀川を訪れ調査をした。

彭陽県は1983年に固原県から分離して作られた県であるが、行政的には現在、固原市に所属しており、寧夏南部の山地である。我々は初年度の調査であることから、まず基礎調査としてこの地域のある村、ある鎮などを対象として建国後の農業集団化とそれの解体さらに西部大開発までの歴史的過程、さらに西部大開発以後の変化、社会主義新農村建設などについて、できるだけ農民、あるいはできるだけ現場にいた人からのインタビューを試みた。西部大開発を研究するにあたって、その基礎として建国後の比較的長い視点からその変化を位置付けることと、政策研究ではなく現場の農民や農村の変化を研究したかったからである。

このインタビューに応じてくれたのが、景世儒氏である。景氏の詳しい経歴はインタビューの中に出てくるが、1926年生まれで、当時83歳、農民出身で、1929年に甘粛省鎮源県から現在の彭陽県紅河郷河源村に移住し、1948年に人民解放軍に入隊し、53年に除隊し、紅河郷信用社主任、区党委員会書記、水電局局長、固原県県長、王洼区区長などを歴任し、農業集団化とその解体の過程、さらには改革開放後の変化、西部大開発政策を自ら実行したり、実見した人物である。景氏の農業や農村の話は、具体的に極めて精彩に富む。さらに恐らくはあまり話したくないだろう文革中に批判されたことなども具体的に話してくれた。長時間にわたってインタビューに応じてくれた景世儒氏に改めて感謝申し上げる。

このインタビューには、寧夏社会科学院歴史研究所の薛正昌所長、魏淑霞助理研究員、仇王軍助理研究員も参加した。各研究員の方の協力に感謝

したい。その他にお世話になった彭陽県教育局の王田忠副局長にも感謝申しあげる。

インタビューは2008年8月29日午後、景氏の現在の住まい彭陽県白陽鎮白陽村で行った。インタビューの質問は、周と馬場が行い、周が適宜通訳を行った。それに対し景氏が答えているが、一部薛所長が答えているところがあり、そこだけ答のところに薛と記してある。その他に（ ）は景氏が言葉を補っているところであり、[]は訳注である。

なおテープ起こしは大学院中国研究科修士課程に所属していた王旭燕さん、翻訳は中国研究科修士課程を修了した加藤紀子さんが担当し、周と馬場が編集をした。

インタビュー

我々がお聞きしたいのは以下の事柄です。

- 1、社区の歴史の変遷。1949年以来、彭陽鎮或いはある村を舞台とした土地改革から農業合作化運動、人民公社化運動、文化大革命、改革開放以後、人民公社の解体以後の農家生産請負制、更に1999年以来の西部大開発に至るまでの全体的な歴史の変遷過程です。西部全体についてではなく、ある鎮もしくは村の変遷についてお話しをお聞きしたいのです。この他に最近、政府は三農問題を重視しており、国家は西部において多くの特惠措置をとっていますが、これらの措置が西部においてどのような変化を引きこしているのでしょうか。
- 2、農業や農村の問題。この地区の農作物の栽培情況、農家の所得情況、更に出稼ぎの情況、そして集団労働についてです。人民公社はすでに解体しましたが、ある村ではまだ集団労働が存在している可能性があります。例えば集団灌溉や集団活動です。また（村民委員会以外の）村の民間共同体にはどのような活動が存在するのでしょうか。例えば祭祀或いは何かの儀式的挙行など。更に教育情況もお聞きしたいです。あなたには比較的具体的に話してもらいたいと思います。今回の調査で我々は出来るだけ真実を知りたいのです。

1、社区の歴史的変遷

個人の経歴および家庭の状況

問：まず、個人の経歴及び家庭の状況を説明してください。あなたはいつ生まれて、彭陽県のどこの村にいらっしゃいましたか？

答：私は1926年生まれですすでに83歳になりました。軍隊出身で、退任するまでずっと部隊の末端で就業していました。紅河郷河源村にいました。河源村は県城から40里[約20キロメートル]離れており、県城以南に位置します。

問：幼い頃から何か教育を受けたことがありますか？

答：ありません。勉強をしたことも、学校へ通ったこともありません。ただ、軍隊で文盲一掃の時に少しか教育を受けました（第一野戦軍192師35団1營3連）。

問：あなたは幼い頃から河源村で成長したのですか？何人家族ですか？両親は共に、農業に従事していたのですか？

答：6人家族で、私は3男です。民国18[1929]年末、民国19年初め（当時、大旱魃に遭ったため）、鎮源県から飢饉を避けるために逃げて来ました。民国16年及び17年、小麦を植えた時に雨が降り、20数キログラム（但しほとんど種子に等しかった）を収穫しました。我々は飢饉のために逃げて来て、ここに住み着きました。当時、土地はありませんでした。

問：幼い頃の生活は苦しかったのですか？

答：両親が亡くなってから、私が一家の煙火柱子（即ち大黒柱）となりました。当時、私はわずか12、3歳前後でした。

問：その時、何を頼りとして生活をしていたのですか？農業ですか？

答：長工をして生活を維持していました。私の父、兄、弟は皆、長工でした。それによって食料を手に入れ、生活を維持していました。また、短工をしたこともあります。

問：あなたは何年に軍隊へ参加したのですか？軍隊に参加した年に結婚したのですか？

答：1948年（戦争で世の中が乱れた秋）に軍隊へ参加しました。1955年に軍隊から戻ってきた後に結婚しました。

問：あなたの奥さんはこの土地の人ですか？

答：同じ村の同じ生産大隊の人間でした。当時、私は区党委員会の書記を担当しており、結婚するには地区委員会に申請する必要がある、承認を得た後、結婚することが出来ました。階級闘争にまで波及するため、階級区分が同じでなければなりませんでした。

問：子どもは何人いますか？

答：息子が2人、娘が3人います。孫が7人、曾孫が2人おり、現在は四世代が同居しています。

土地改革から農業集団化へ

問：復員して戻ってきた後、引き続き農業に従事したのですか？

答：そうです。戻ってきた後、作物を作りました。ちょうど土地改革に居合わせ（1952年）、私も土地、牛、豚、鍋を分配されました。当時、私の長兄は互助組の組長を担当していました。合作化の後、1954年に互助組から初級合作社に変わり、その後高級合作社へと移り変わり、最後に人民公社となりました。

問：土地改革の時、あなたたちの村には何戸の地主が存在していましたか？

答：若い地主が一人いただけです。その地主は480ムーの土地を持ち、2頭の牛、50匹の羊を飼い、2人の長工を雇っており、その中の1人の長工は身体に障害のある人でした。

問：あなた個人はどのくらいの土地を分配されたのですか？

答：我々の村は農地が少なく、一家全部で20数ムー（即ち一人当たり3ムー余り）が分配されました。

問：当時、あなたのお兄さんが所属していた互助組には何戸ほどが存在していたのですか？

答：全て同じ村の人により組織された37戸です。

問：その村には他にも互助組がありましたか？

答：ありました。1つの大隊には12の生産大隊があり、これは12の互助組（即ち、後に言うところの生産隊）でもありました。私は紅河郷信用社の第一主任でした。

寧夏農村の建国後の変遷について

問：それでは、あなたは戻ってきた後は農民ではなかったのですか？

答：軍隊で少し教育を受けたことがあったため、私は戻ってきた後、紅河郷の第一信用社主任となりましたが、当時、給料はありませんでした。上級組織は文書を下して任命すればいいのです。預金、貸付の責任を負い、人を動員して合作化を行いました。また、土地、牛羊等の登録業務の責任を負っていました。

問：当時の郷信用社は宣伝活動を担当しなければならなかったのですか？

答：宣伝活動は郷党支部が主管となっていました。

問：その時、あなたはすでに共産党員でしたか？

答：私は軍隊で共産党に入党しました。

問：その信用社は全郷の農民の預金に責任を負うのですか？

答：農民の預金と貸付業務に責任を負います。例えば、養殖業、農業生産物や農具等を購入する際に貸付を行いました。当時はまだ化学肥料はありませんでした。信用社はお金がなくなると銀行へ申請に行き、預金を銀行にし、銀行は利息を出して農民に与えたため、銀行の出先機関であると言えます。

問：では、あなたは業務幹部であり、行政幹部ではなかったのですか？

答：信用社で1年勤めた後、区に転属させられました。1955年に区で共産主義青年団委員会書記を担当し始めました。1956年に城陽区区委委員会副書記（紅河郷党支部書記を兼任）を担当し始めました。

問：では、あなたはまず共産主義青年団委員会で働き、その後、共産党の仕事をしたのですか？

答：そうです。1971年に転任させられて固原県の水電局へ行き、局長を担当しました。

問：土地改革以後、全県の状況をあなたも比較的 understands しているのですね。

答：その時は固原県と呼ばれていました。当時、37の人民公社があり、3つの区、1つの鎮を管轄していました。1982年、王洼区で区長を担当した後、退任しました。

大躍進

問：1958年の公共食堂はどのような状況でしたか？

答：1958年末、1959年初めに公共食堂（大鍋の飯、すなわち親方日の丸にと変わった）は始まりました。

問：公共食堂はどのような原因によって終結したのですか？

答：上級組織からの指示は何もなく、公共食堂は1961年から自然に解散しました。1958年にかつて打鍋献鉄運動が起こったことがありました。その時、国家は貧しかったため鋼鉄の生産が追いつかず、このため打鍋献鉄運動が起こり、農民の生活に対する影響は非常に大きかったです。1959年、元彭陽公社の信用社主任（袁保清）は左傾路線の甚だしい幹部でした。打鍋献鉄運動の中で、かつて1戸の農民が作った飯を直接落とした後、鍋をおちこわして、処分を受けました。

問：それ以前に地方で反右派運動はありましたか？

答：具体的にははっきり分かりません。当時、私は末端で働いていたため、鎮レベルでは反右派運動はありませんでした。県城では反右派運動があり、かつて何人かが処罰を受けたことがあります。毛主席は、上級機関は一にほらを吹き、二に押さえつけ、三に許諾を与え、下級機関は処理しにくい、とおっしゃったことがあります。これらの問題は中央政府に指摘された後、修正しました。

問：1964年になって、生産は良くなりましたか？

答：良くなりました。しかし、1つの意見があります。一つの県にはただ一人の生産隊長がいるだけです。全ての生産活動は県長の指示下で進行しなければならず、即ちこれが計画経済の生産です。また、農業は大寨に学べ、と提起しました（実際には1962年にすでに始まっている）。よく学んだり、よく学ばない鍵は指導（即ち一つの県にはただ一人の県長がいる）にあるとします。同時に農民の間にも1つの意見があります。民衆の意見は根本的に大寨に学ぶ必要はなく、自家保有地の意義を十分に理解すればいいのです。当時、農民の理想的な生活様式は自家保有地、自家保有の羊、30ムーの土地、1頭の牛、妻と子ども、更に暖かいオンドルを持つことでした。上級機関は地方の小農経済に対する指導思想に反対意見を持っており、纏足をした女性が歩く（わずかの歩行も困難である）ようだと言っています。その時、末端では全力で生産を行っていましたが、そのことが上へ上がってい

くのは難しく、とても困難でした。

自然災害

問：1959、1960年に自然災害が発生し、深刻であったと聞きましたが固原県の状況はどうであったか、説明してください。

答：固原県の状況は非常に辛苦なものでした。私はかつて2度、延安に行って会議に参加しましたが、現在の王洼区は当時、48の県のうち最も貧しい場所でした。主な問題は3年間続く旱魃だけでなく、人間の飲用水の問題を解決する方法がないことでもありました。王洼区の貯水池は皆、私が作ったものです。（食糧の不足は）固原県政府がトウモロコシを買ってきて、500gのトウモロコシを2元、後に0.28円で人民に売りました。県政府が国外で買い付けた食糧を解放車で運び込みました。

問：どの年に買い付けたのですか？

答：1956、57、58、59、60年です。

問：その時、固原県では飢饉のため逃げ出していく人はいましたか？

答：いませんでした。その時は解放されたばかりで農民の意欲や信念は高く、共産党を非常に信頼していました。わずか7ヶ月で全国では合作化が実現されました。問題は大きさに言うことが生れたことでした。私は事実に基づいて真実を求めるという原則によって、ずっと「21.75kg（1ムー当たりの生産量が21.75kg）」をありのままに上級機関へ報告していました。しかし当時、多くの幹部が大きさに言うやり方が普遍的に存在していました。

毛主席はかつて、上級機関は一に均等、二に徴用、三に金を受け取り、下級機関は処理しにくいとおっしゃられました。このため、一部分の金銭の費目を持ち出して農民の心を買戻さなければなりません。そこで、この後平均主義の労働力に対して現金を支払うことになりました。1963年になると、情勢は大きく好転しました。自然環境、生産条件は全て好転しました。あの（3年間の自然災害）期間、自然災害は一つの原因であり、人為的な減産も一つの大きな要因でした。

四清運動

問：文革以前に、四清運動はありましたか？

答：1960年に双反（即ち悪人や悪事に反対する）運動が起こりました。悪事とは主に食糧の窃盗、農業生産の破壊等を指しています。双反運動も一つの左傾運動でした。1963年に政社という呼称が始まり、政社の中心的な政策は左傾路線を徹底的に継続することであり、一年に一度、幹部を正しました。1964年に社会主義教育運動の普及が始まりました。

まず、3700人余りの幹部を集めて寧夏の永寧で試験的に実験が行われました。村に入った幹部は基礎幹部と一緒に、睡眠をとったり、肉を食べてはならず、酒を飲んではならないなど多くの制限が定められました。基礎幹部に対しては無愛想にしなければならず、大変冷ややかでした。更に自白を強いるような方法で幹部を正しました。劉少奇夫人の王光美の指導の下で行われました。私はそこに83日間滞在して戻ってきましたが、県以上の幹部は引き続き滞在して4ヶ月間教育を受け、その後、全面的に活動を展開しました。四清運動は1964年から始まり、文化大革命まで持続し、最後は階級の隊列の整理運動へと展開しました。四清運動の際、中央政府は『農村工作60ヶ条』を出しました。この後また23ヶ条が出され、幹部に対する冷ややかな方針が改められました。

問：あなたが当時、所属していた公社の四清運動の具体的な状況はどのようなものでしたか？

答：幹部を正し、千字戸（1000斤 [500kg] の食糧と1000元を着服した幹部）の行為を正しましたが、汚職をしていない幹部も汚職犯とされました。県ごとに平均10人前後の幹部が批判を受けました。1966年に展開した黒五類運動は、私が所属していた公社でも数十名の都市から来た黒五類を受け入れました。

文化大革命について

問：文化大革命の時、あなたは迫害を受けましたか？

答：はい。私は全県の斬首名簿73人中の14人目に入れられていました。

問：文化大革命の情況はどのようなものでしたか？

答：1966年に文化大革命が始まりましたが、当時私は彭陽区の区長と共産党区委員会の副書記を兼任していました。1966年末に始まり1969年に終結しましたが、私も批判を受けました。まず私を「反動的で頑固な資本主義の道を歩む実権派」と定め、最後には（私が恐れていた）反革命現行犯分子とされましたが、これらは民衆の決めたのであって政府が決定したわけではありません。私が批判を受けたのは、私が当時、文革小組の成員に対して懐疑的な態度を持ったためであり、反革命分子と判断されてしまいました。

批判を受けましたが、私は逃げ出さずでした。毛主席は荒波にもまれ、世間を知らなければならぬとおっしゃったので、批判を受けることは民衆闘争の艱難辛苦と世間に耐えることである、と私は考えました。当時、現状反対派の一部のメンバーは公事にかこつけて私服を肥やし、個人的恨みを公の事を利用してはらしており、このため私は多くの苦難を受け、腕が脱臼しました。当時、私が終始堅持していた信念は毛沢東に忠誠を尽くすことであり、中国共産党に忠誠を尽くすことでありました。その後、1969年12月から1971年にかけて私は固原県の発電所に転属させられ、所長（当時は革命委員会主任と呼んでいた）を担当し、また、党支部書記も兼任しました。この後、1971年12月にまた、草廟郷公社へ転属させられ書記を担当しました。草廟区に転属させられて書記を担当したのは、中央政府の農業会議が終結した後、一名の農業幹部が来たためです。彼は、農業業務は農業を熟知している幹部に担当させるべきであると言いました。

問：文化大革命の期間、紅衛兵と農村における社会主義建設はどのような状況でしたか？

答：1969年に紅衛兵がやって来ました。始まってすぐの頃は外へ出て経験交流をすることはありませんでしたが、毛主席が天安門で紅衛兵の代表と接見してからは経験交流が始まり、文化大革命の全国における展開が推し進められました。至る所で資本主義の道を歩む実権派がつかまり、中央、省から生産大隊に至るまで全面的に展開しました。

問：都市の紅衛兵を農村に派遣して革命を行ったことはありますか？

答：ありません。

問：この県には上山下郷に参加した知識青年がいますか？

答：杭州と銀川から来た知識青年がいました。私は知識青年が上山下郷の鍛錬を受け、実践を通じて教育を受けることは良いことだと思います。現在の学生はなぜ殴打、破壊、略奪を行うことが多いのでしょうか？私は現在の映画やテレビ中の暴力シーンが彼らに対して悪い影響を与えているからだと思います。

問：あなたが所属していた公社にはどれぐらいの知識青年がきましたか？

答：7つの公社のうち、どの公社にもいました。

各戸生産請負制の始まり

問：各戸生産請負制の始まりについてお話し下さい。

答：1978年に作業班が実行され始めました。当時、私と共産党区党委員会副書記の薛某は彭陽公社における典型的な人物でした。私は周溝村李砦生産隊でまず試験的に行ってみました。まず、李砦生産隊を二つの作業班に分けました。周溝村の李砦生産隊は農業合作化以来、基礎条件は良かったのですが親方日の丸のため、生産はずっと上がりませんでした。(1970年)この生産隊は700人余りの人口を有しており、私は生産隊を2つの作業班に分けました。2ヵ月実験を行ったところ生産は上がりましたが、その後はうまくいきませんでした。

のちに私は一つの方針を制定しました。労働によって土地を定め、土地によって生産を定め、生産によって集団を定め、超過生産を奨励し、減産を処罰する(当時、このようなことをすると官職を失う可能性があった)というものでした。その後、私はまずトウモロコシ、ジャガイモ、粟を世帯ごとに請け負わせました。開始してから間もなく、農民からの信用がなくなりました。化学肥料が来てから、私は化学肥料を請負に応じて支給することを決定し、これによって農民の信用を得ました。

各戸生産請負政策を施行したその年、食糧生産は204トンに達し、その時まで歴史上最も高い生産量は113トンでした。これに反して、その年の全県の95%の村は全て生産が減りました。私はその年の共

寧夏農村の建国後の変遷について

産党県委員会工作會議でこの方法を報告しました。會議の期間、張義公社の書記が私の報告を聞いた後、私と談話をし、翌年（1980年）、我々の公社では全面的に生産責任制を導入することになりました。1980年春（国家はまだ請負責任制を開始していなかった）、張義公社は李砦村の経験を取り入れた基礎において、全面的に生産責任制を施行しました。

当時、固原地区の政府指導部は断固として責任制に反対し、自治区では2つの派閥、支持意見と反対意見に分かれました。1980年8月、自治区政府は工作會議を召集し、會議で請負責任制を批判する方法を準備しました。會議が召集されて2日目に、胡耀邦が寧夏自治区へ視察にやって来て、自治区の書記は胡書記に地域業務も報告をしました。その結果、胡耀邦は生産責任制を支持し、農家生産請負制度を他の地区でも行って発展させました。

問：個別農家への請負を人民は歓迎しているようですが、問題は上級機関にあるのですか？

答：そうです。地区政府の指導者の意見は、まず農民に種をまかせてから責任制を行うというものでした。1981年に農民が自発的に生産責任制を始めました。毛主席は落後した幹部はいるが、落後する農民はいない、とおっしゃいました。私はとても道理にかなっていると思います。例えば農民は積極的に土地を請負おうとしますが、政府は抑圧して認めません。

改革開放後の彭陽県の農業

問：改革開放後の彭陽県の農業についてお話し下さい。

答：1978年に中国科学院副秘書長の石山が固原県で長期にわたって調査を行い、固原県の生産方針をどのように改善するかということの研究をしました。彼と私は雑談をした時、ここでは単純に食糧を求めることが出来ず、植樹や草の栽培、牧畜業を発展させることに力をいれなければならない、と話しました。当時、討論していた固原の発展方針は退耕還林し、草を栽培して放牧することで農業を促し、農業、林業、畜産業を全面的に発展させることに力を入れることでした。当時は考

え方が統一されていなかったもので、施行されることはありませんでした。

1983年に彭陽県が成立した後、前述した方針が施行され始めました。彭陽地区は過去に「耕地は山の低いくぼみにあり、傾斜しているところはすべて壕であり、北風は浮土を飛ばし、洪水が壕を作り、一声の叫び声はとおりに、歩いていくと半日かかる（彭陽地区の地形情況の描写）」という論法がありました。他に「山があり、川があり、淵があり、川には水があり、田にまく」という論法もあります。

1983年に我々は全县を十字の骨組み（即ち十字型の交差路）で分けました。1984年春、道路の両側は基本的に緑化が実現しました。十字の骨組みの中間に小流域を定めました。次第に溝や分岐点、くぼみが形成され、全面的な緑化が実現しました。彭陽が県になって25年以來、植樹や造林活動のこれまでの指導は非常にうまく執行されました。全国的に見ても、植樹、造林、草の栽培が非常に典型的な県です。人工水路の修理、ダム建設を通じて灌漑地が発展しました。「川の両側の土地が灌漑地へ変わり、原野が細長い田畑へ変わり、山地が段々畑へ変わり、高山が緑を帯び、経済林が山の中腹に立ち並び、大いに果樹園の発展に力を入れてます。」

彭陽の気温は高く、水質は比較的良く、飲用水は鉱泉水です。地下水は基本的にまずまずであり、地表水は少なく、1.2メートルに達しません。耕地面積は150万ムーあり、私の推定では、退耕した農地がおおよそ50万ムー前後あります。このため、かつて私は県に意見を出したことがあり、我々の県では農作物の配置上、実際に基づいて正しく行動し、その土地に適したようにする必要があり、自然の法則に背いてはなりません。彭陽県の歴史から、冬小麦の栽培面積が多いです。現在、上級機関からはジャガイモを栽培するように要求されており、ジャガイモは陰湿な地区や、黒土地区では栽培することが出来ますが、黄土地区での栽培は質が悪く、かつ生産量が低いので栽培は20万ムーを超えることができません。小麦の面積は最小でも20万ムーより低くできません。最も発展に適するのは、トウモロコシであり、全县で25万～30万ムー栽培することができます。余っている土地には野菜、

寧夏農村の建国後の変遷について

搾油植物を栽培し、草地にしています。上級機関は実際の状況を理解しておらず、一面的に面積の広い土地にはジャガイモを栽培するように要求し、干渉することが多く、農業の正常な生産と発展に影響を及ぼしています。現在施行しているのは市場経済であり、このため政府は無理に経済生産に関与することが出来ません（司令性はまだ存在しています）。

人民公社解体以後の変化

問：公社が郷へと変わった時の状況はどうでしたか？

答：1980年に革命委員会が県政府へと改められ、選挙を通じて県長に選出されました。同年、人民公社が郷鎮政府へと改められました。

問：この体制の変化について、あなたは違和感を感じましたか？

答：行政と企業権限を分離したことが、比較的良かったと思います。政府は政務に専念しなければなりません。我々の県では現在、正真正銘の市場経済がまだ形成されていません。例えば、農民は小麦を栽培したいのですが、政府はジャガイモを栽培するように定めています。

問：村では生産大隊が村民委員会、村民小組と変わりましたが、あなたは どう思いますか？

答：生産責任制を実現した後、農村組織の機能は弱くなっていきました。

問：農業生産と農業の変化について、集団で請負制の指導を行うという変化以外に、化学肥料、農業の自主改良、農業の機械化方面、農民の生活等の方面で、どの変化が最も大きかったですか？

答：各戸生産請負責任制度の変化が最も大きかったです。次に、どのように完全な生産をするのか、生産と供給の一本化、市場農業の発展について更に研究しなければなりません。これらの問題を解決するのに最も重要なことは、まず指導者の思想を転換させる必要があります。市場経済の発展の要求に適応することが必要です。現在、計画経済の思想は依然として農業経済の発展を束縛しています。

政治協商会議での仕事

問：1980年から、県長は何年間担当しましたか？

答：1年半担当しました。その後、政治協商会議で9年間、主席を担当しました。

問：県長を退任した後は政治協商会議で仕事をしていたのですか？

答：そうです。彭陽県の政治協商会議主席を9年間担当しました。

問：政治協商会議の業務内容はどのようなものですか？

答：主に民主統一戦線の業務を行います。政治を協議し、民主的に監督し、協力して仕事を行い、広く交際します。統一戦線の業務は主に民主的に団結をして仕事を行うことや回族と漢族の団結、主な民族間の団結であり、更に党外の人事と人員の就任に関する業務もあります。これは共産党の宝物であり、特殊な働きをします。

問：具体的にはどのようにして漢族と回族を団結させるのですか？

答：我々の県には、回教徒、漢民族、トンシャン族がいます。回族と漢族間の関係は比較的打ち解けたものです。

2、農業や農村の問題

農業の問題

問：この地区は主にどのような農作物を栽培していますか？

答：主に生産しているのは冬小麦です。確実に生産することができ、かつ、寒さに強いのが特色です。現在、1ムー当たりの生産量はおよそ250～300kg（以前は21.75kgであった）です。私の経験に基づくと、小麦は確実に生産することができ、早魃に遭っても収穫することが出来ます。

問：冬小麦は何月ごろに種子をまくのですか？

答：陽暦の7～8月（24節気の白露、8月8日ごろ）にまきます。

問：いつ収穫するのですか？

答：2年目の夏至に収穫します。

問：小麦を収穫した後は何を栽培するのですか？

答：そば（5月、夏季の最も暑い時期にそばの種をまく）です。もう一つ主に生産しているのがトウモロコシで、陽暦の3～4月に種をまき、およそ90日後には収穫することが出来ます。更にもう一つ、主に生産しているのがジャガイモですが、保存するのが難しいです。

寧夏農村の建国後の変遷について

問：あなたが先ほど話した 21.75kg が指しているのは、どのような作物の収穫ですか？

答：私が指したのは、平均 21.75kg ということです。

問：現在、1 ムー当たりの生産量は 250 ～ 300kg であり、以前と比べると大々的に高まりましたよね。

答：生産量を高めることが出来たのは、入念に耕作をしたからではなく、化学肥料が大きな効力を発揮したからです。

問：肥料以外に、農業の基盤上で何か大きな変化はありましたか？

答：以前農民は主人となれなかったのです（即ち農民の一存では決めかねた）。例えば、生産隊の土壌の質は異なるにも関わらず、トウモロコシだけを栽培するように定めています。人民はどうすればよいでしょうか。問題は政府が何を栽培するかということに関与するだけで、収穫後、どのように売りさばくかということに関与していないことです。

問：現在、農民の農業収入はどのくらいの割合を占めていますか？

答：トウモロコシは去年、500 g ごとに 0.5 元であり、今年は 0.7 元まで引きあがるかもしれません。トウモロコシの生産量は比較的高いです。私は五穀を全て栽培する必要があると考えています。現在、燕麦を栽培している人は比較的少なく、これは生産量が低いためであり、1 ムーごとにおよそ 100 ～ 200kg 生産することが出来ます。

問：1982 年に退任した後、更に観察を行って、農村を調査して事情を理解しましたか？

答：時々、私は観察に行きます。以前と比べて変わっており、更に良くなっていました。1 つ目は植樹方面であり、至るところに樹木が見られました。以前は乾燥して日照り、かつ、電が多い気候でしたが、現在は雨が多くなり、電も少なくなりました。私の観察と経験に基づいて総括すると、土壌は紅土、黒土、黄土、砂質土が主であり、その中でも紅土が多く、黒土は最も肥沃です。合作化の段階で、災害はとりわけ電害が多く、農業にもたらす危害はとて大きかったです。2 つ目は農民の住宅状況の変化が大きいことです。日照りで乾燥している地方では水を貯蔵するために掘った井戸が多いです。この地区は以前、洞穴式住居が主であり、地震を防ぐことが出来ました。3 つ目の変化は

畜産業の変化が比較的大きく、良く発展していることです。この養牛、養羊の畜産戸は増加しています。食糧の栽培に適していない土地を改良して草地にすることで畜産業と牧畜業の発展を促進することができ、これは非常に前途があります。政府は土地を農民に請け負わせ、農民に十分な自主権を与えるべきであり、農民の生産に関与しすぎるべきではない、と私は思います。政府の主流（市場へ農業発展を導く）は正しいものであるが、方法に問題があり、改善する必要があります。

問：農作物の品種にはどのような変化がありましたか？ずっと冬小麦が主だったのですか？

答：変化はとても大きかったです。冬小麦は減少し、燕麥は価格は高いが生産量が低いため、基本的に栽培されなくなりました。そばは一部分でまだ栽培されています。

問：何か新しい品種を導入しましたか？

答：関東ハコヤナギの導入は林地と草地を破壊しました。

問：固原県で最も稼ぐことの出来る工芸作物は何ですか？

答：搾油原料（胡麻）です。私が王洼区区長を担当していた時、年間で24万kgの搾油原料が生産されたことがあります。紅河は冬小麦とトウモロコシが主であり、東山は搾油原料とじゃがいもが主です。

問：県外へ野菜を輸出していますか？

答：ジャガイモが大量に大都市へ輸出されていますが、買い付け価格は異なります。私が読んだことのある歴史の書籍で、中国の歴代の王朝の食糧には順流（西北の食糧を南方へ運ぶ）と倒流（東南の食糧を西北へ運ぶ）があり、倒流は少ない、と書いてありました。南方の水害が多いため、生産量は安定していません。彭陽では水稻を栽培することができず、綿花と落花生は栽培することが出来ます。

出稼ぎの影響

問：全国で現れた出稼ぎブームの固原県と彭陽県における状況はどのようなものですか？

答：（全国の状況と）同じです。現在、農村の子どもは都市で学校へ通うことが多いです。

寧夏農村の建国後の変遷について

農村では、一人の教師が基本的に4、5人の学生を教えています。農村の教師の教養水準は低く、かつ少なく、これは若くて優秀な教師は皆、都市へ移って行ってしまい、農村の教師は大体において年長の者が残ってしまうためです。現在、働くにも大卒資格が必要であり、農民には方法がなく、子どもを都市へ送って勉強させるよりほか仕方ありません。大体は夫が働き、妻は家事をこなして家庭と子どもの世話をします。このため農村の労働力、とりわけ若者の労働力が大量に減少しました。農村での農業は現在、主に機械に依拠して栽培を行い、化学肥料に頼っていますが、大して入念に耕作を行っているわけではありません。

現在、農村での畜産業は新しい生体であり、発展を継続させることができ、潜在能力が大きい、と私は考えています。ある畜産専門戸を訪問したことがあります、一家は7人家族であり、5人が他郷で働いており、家には老夫婦2人だけが残っていました。280頭の豚を飼育しており、その中の38頭は肥えた豚（1頭が100kg前後ある）で、売るつもりの方でした。他に220頭の子豚もおり、畜産場は非常に衛生的でした。1頭の豚はおよそ450円で売ることができ、220頭の子豚も価値があると考えられます。このため、私は当地で財を得る（商機を探して家を栄えさせ、金持ちになる）べきであり、出稼ぎに行くべきではないと考えています。

問：県政府は出稼ぎを奨励していますか？それとも人が戻ってくるように注意をしていますか？

答：地方では依然として出稼ぎを奨励し続けています。特に若者で他郷へ行く者が多いです。しかし、出稼ぎでは一年に5000～6000元前後しか稼ぐことが出来ず、その上、企業は契約を実行することがなく、例えば本来、一ヶ月700元の給料が事実上400元前後しか与えられないことがあります。一度出て行ったものの、結局戻って来ることになり旅費を稼ぐだけになってしまいます。

問：若者が多く出て行ってしまい、村にはどのような問題が存在していますか？

答：土地問題が存在しています。農民の多くは土地を下請けに出すか、も

しくは請け負った土地を直接放棄してしまいます。更に、子どもの教育問題（児童の留守番）と養老問題もあります。

問：政府が農業税を免除した後、農民の負担は軽減しましたか？

答：そうですね、農民はほとんど何らかの負担がなくなりました。商工税も免除されたため、小商人の発展が速くなりました。これらの政策はとても農民の歓迎を受けました。

薛：現在、国家の農村及び農民に対する政策はとても優遇されたものであります。

農民の集団的行動、医療、福祉、教育について

問：人民公社の解体後、農村にはまだ集団労働がありますか？

答：ありません。我々の県にはありません。全て専門家が指導し、作業隊と機械化で作業を行いました。

問：農村の宗族組織はどのようなものですか？例えば祭祀、族譜の作成、祠堂の建築などはどうですか？

答：以前と比べて盛大になりました（本人は反対意見を持っており、見栄を張って浪費していると考えている）。とりわけ、石碑を建てるのが比較的多いです。更に、葬儀も比較的盛大に行うようになり、笛を吹いて太鼓をたたいたり、劇を演ずる者もいます。族譜の作成はあまり多くありませんが祠堂の建築は増加しています。

問：労働能力が無く身寄りも無い農民に対して、誰が世話をする責任を負うのですか？まだ五保戸制度は存在していますか？

答：存在しています。全て政府が責任を負って管理し、世話をしています。

問：村と村の間には地盤を争奪するためなどに生じた矛盾についての論争は多いですか？どのようにして解決するのですか？

答：土地と土地との境をめぐる論争が生ずることが比較的多く、政府は一般的に表立って関与しません。しかし、論争が原因で殴り合いの喧嘩や死傷事件が起こった後、政府が協議、或いは調停を通じて解決するようになりました。

問：民国年間、或いは改革解放前に紅白[吉事と凶事の]理事会はありましたか？

寧夏農村の建国後の変遷について

答：ありませんでした。

問：現在、集団で組織した、農作物の見張り或いは治安を守るものがありますか？

答：ありません。

問：現在、農村の子どもが少なくなり、農民も教育を重視するようになっていますか？医療衛生の条件は良くなりましたか？

答：個々の家庭について言えば、そうでもありません。しかし、医療衛生の条件が改善、及び向上したため平均寿命が延び、このため国家について言えば、人口が更に増加しました。

問：計画出産の実施はどうですか？

答：農民は基本的に2人の子どもを産み、公務員と労働者は1人だけ産みます。

問：教育の負担はどうですか？

答：9年間の義務教育費はすでに全て免除されており、授業料と雑費も減免され、農民は基本的に負担はありません。

問：あなたが県長を担当していた時、教育状況はどのようなものでしたか？

答：彭陽が県になる前、大学、専門学校に通う者は少なく、一般的に中専(中等教育学校)へ通う者が多かったです。もともと3つの中心的な玩小(小学校)があり、教育の質は比較的良いものでした。県ができた後、教育が積極的に強化され、大学に通う学生が増加しました。

問：県には何か特別な教育方針がありますか？

答：ありません。重要なのは指導と教員及び責任問題です。

問：最近、村に幼稚園が出現しましたか？

答：2、3出現し、良い趨勢にあります。県には元々、1つの公立幼稚園と2つの私立幼稚園が存在し、今年また1つの私立幼稚園が増えましたが、まだ不足しています。

問：農民の子どもも幼稚園へ送られるのですか？

答：はい。農村から送られてくる子どもは多く、多くの農民は皆、子どもに幼稚園教育を受けさせた後、小学校へ通わせたいのです。農民は子どもの教育問題を非常に重視しています。

問：この地区の風俗にはどのような特色がありますか？

答：比較的寛容であり、排外的ではありません。

水の問題

問：近年、気候が変化して雨が比較的多くなりましたが、まだ井戸は必要ですか？

答：まだ、継続して増やさなければなりません。現在の重要な点は如何にして井戸の数を増やし、かつ、比較的丈夫にするかということです。現在は土質（黄土）が柔らかいため、地盤が陥落することが多いです。

問：以前、農民は公平に水を分けるために何か研究していたことがありますか？

答：灌漑をするために、水を奪うという状況が多かったです。上流に住む農民は水源を切断し、下流に住む農民が灌漑をすることが出来ないようにしました。現在もこの種の論争が存在しています。

問：水は公共資源であり、政府が配分と管理の責任を負うものであって、如何なる人のものでもないですよね？

答：そうです。個人が勝手に横領することは出来ません。ただし、個人の井戸は個人のものとなります。

問：一戸ごとに、平均して幾つの井戸がありますか？

答：2つ前後あり、全て生活用水（灌漑用水はない）です。一つは軒先のしずくを蓄えるために用い、これは飲料に適した水です。もう一つは地面の雨水を蓄えるために用い、家畜の飲用水等の問題を解決するために用います。現在、東山の一部の地域では旱魃に遭い、飲用水が問題になっています。

問：井戸を掘るにあたり、政府は補助を与えてくれますか？

答：はい。井戸を掘る、植樹をする、草を植える、メタンガス池を作る時は政府が補助を与えてくれます。

問：メタンガスは普及していますか？

答：基本的に普及しています。

問：太陽エネルギーは普及していますか？

答：あまり普及していません。

問：現在、固原県城の地下水位はすでに低くなっていますか？

答：低くなっています。井戸を掘ることが多く、水位の降下が激しいです。

退耕還林、退耕還草

問：胡耀邦が提起した退耕還林〔農地を林地に変える〕、退耕還草〔農地を草地に変える〕という政策をここで実施した時、どうでしたか？

答：この県域で実行したところ比較的うまくいき、全国でも比較的地際立っていました。特に牧草の栽培はうまくいきましたが、牧草を売ってお金に換える方法がありませんでした。ここ数年、牧草の種の価格が高くなりました。このため、現在は牧草の栽培は減少しています。

問：食糧に対して、何か影響はありますか？

答：しばらくは何も問題はありません。しかし、もしも何か災難が起こったならば問題が出てくる可能性があります。

問：農村の燃料問題はどうか？

答：以前は主に燃料植物に頼ってましたが、現在は主に石炭と液化ガスを利用していています。

問：農村の生活で消費等のために現金を利用しますが、農民は主にどのような方式によって現金を得ているのですか？

答：ここ数年、燃料、肥料、ビニール等の値上がり幅が比較的大きくなっています。政府はトウモロコシの栽培を奨励し、農民もトウモロコシを栽培したいと考えています。しかし、化学肥料とビニールの価格が高すぎるため、トウモロコシを栽培する者は少ないです。

問：現在、農薬を使用している人は多いですか？

答：そうですね、以前は日常的に農地で雀を見ることができましたが、長い間、農薬を使用していたため雀の生存環境に対する影響が大きくなり、現在ではほとんど雀を見ることができません。

問：退耕還林、退耕還草政策を実行した農民に対して、政府はどのようにして補助を与えたのですか？

答：1 ムー当たり 100kg の食糧を与え、40 元の補助金を支払いました。2008 年 4 月、胡錦濤国家主席がここへ視察に来た後、退耕還林した者に対する補助を更に 4 年（本来は 8 年間である）延長することが決定しました。しかし、当時回収することが出来た農地と比べて、植林

地の利益の回収は遅れるため（7～8年）、農民は容易に引き受けませんでした。4年延長するという政策を推し出したとはいえ、収入は依然として農業による収入には及ばないため、植林したくありませんでした。一方、山岳地帯の多くの住民が（山から）下りてきて農地が荒れ、草地も次第に発展していきました。ここ数十年の改造を経て、この付近の山は全て緑へと変わり、これはとても大きな変化であると言えます。退耕還林に関して、数量上、政策上は比較的良いものですが、植林方法に問題があるので、経済林はすでに数年間、収入がありません。

薛：寧夏大学と島根大学は以前ここに来たことがあり、第一巡目の8年にわたる退耕還林政策が終結した後、引き続いて共同で調査を行いました。

西部大開発について

問：西部大開発以後、あなたは農業政策に何か新しい変化があったと思いますか？

答：私は中央政府を重視しています。我々の鎮について言えば小康社会の進展がとても速く、県内では非常に重視されています。西部大開発後から、この県の付近は多くの石油田が採掘され、およそ3メートルの深さがあります。石炭の採掘も増加し、目の前に見えるこれらの山は皆、石炭を埋蔵しており、およそ8メートルの深さがあります。

問：交通は明らかに便利になりましたね。村々には道路が通じ、電気が通じ、テレビやラジオが放送されるようになりましたよね？

答：そうですね。道路の建設は非常に速く、現在は村々に道路が通じています。特に、分岐点での建設が素晴らしいです。

薛：また県にはインターネットが通っています。

答：今回調査に来た共産党県委員会書記（張有成）に対し、民衆は素晴らしいと報告しました。胡錦濤国家主席、温家宝総理もかつてここへ訪問に来たことがあります。

問：あなたの晩年の生活は幸せなようですが、何か気がかりな問題がありますか？

寧夏農村の建国後の変遷について

答：私には現在、心に引っかかるものがなく、ただ、社会主義が延長されることを希望するだけです。私は貧乏人に生まれたため依然として国家情勢に関心があり、ニュースをずっと見えています。他には一般教養を学んでいます。歳はとりましたが、私はまだ毛筆の練習をしています。

The Changes of Ningxia (寧夏) Farm Village after the Foundation of People's Republic of China

BABA Takeshi, ZHOU Xing

Abstract)

This report is the record of the interview to JING Shixu (景世需) in August, 2008, who was originally a peasant living in Heyuan (河源) village, Honghe district (紅河鄉), Pengyang prefecture (彭陽縣), in the southern area of Ningxia (寧夏), and the clerk of CCP, the head of the Bureau of Waterworks, Electric Power, and the Prefectural Governor. The content of the interview is as follows:

1. The change of the Pengyang prefecture through the the period from the founding People's Republic of China, Grouping of agriculture, Cultural Revolution, and the beginning of the Contracting system of each family, until breaking up People's Communes.
2. The condition of agriculture in the present Pengyang prefecture, the influence of the farmer's work away from home, the problem of the group behavior, medical service, welfare, and education, the problem of water service, and the influence of the policy of conversion from farmland to forestland, and conversion from farmland to grassland and the influence of the policy of Western Large Development.